

魂の変態について 島田正路氏著[コトダマ学]上巻より抜粋

蝶は成虫となるまでに幼虫—蛹—成虫と三体の変態をする。辞書で変態の意味を調べると「形を変えること。生物学的には個体発生の途中で、親と全然異なった形をとること」とある。この意味では人間は変態しない。赤ちゃんから成人し老人となるまでの形の上では蝶にみられるような著しい変態はない。しかし人間の魂は五態の変化が可能である。以下人間の魂の 五段階の変態について考えることとしよう。蝶はその蝶が生きている限り幼虫—蛹—成虫と自然に変態する。しかし人間の魂の変態はその人間が生きている間に自然に起こるわけではない。その人が希望し努力して初めて変態が可能となる。一生の間初めの段階から変態進化しない人間もいる。まず人間の魂の初段階は五官感覚を基礎とした欲望の世界である。赤ちゃんはおなかがすけば母親の乳房をする。成長するにつれておもちゃを欲しがる。きれいな服を着たいという。さらにはお金が欲しい、地位が欲しい、名誉を得たいと欲望はエスカレートする。皆五官感覚を基礎とした欲望の所産である。欲望には限りがないから人によってはこの欲望の段階だけが人間の心の世界だと思い、一生をこの世界だけに暮らすこととなる。この人にとって人間の魂の変態していくほかの段階である学問・感情・道徳等は自己の欲望を達成するための手段であるにすぎない。その典型を現代の政治家に見ることができる、といったら失礼になるであろうか。

変態の第二段階は学問の世界である。第一の欲望の世界で出会った出来事を経験として、それから経験と経験との間の相互の関係を考えてゆく段階である。一般にはこの作業を学問・科学と呼んでいる。かく行ったらかなくなった。だから今度もそうなりたければ、かくしたらい。これが学問の始まりである。子供が成

長してこの知恵がつくことを物心がつくという。小学校から中学・高校・大学と進ごとにこの智慧が体系化してきて、学問・科学の形ができあがってくる

第一の欲望体験を掌握してそれを体系化したのが学問である。ここで人間は個々の体験の立場から理論的体験の段階で進化変態したことになる。近代の大型産業化がその典型である。このことから人間の魂の進化変態というのは、一つの段階の出来事を体験によって総合して、それによって今までの世界とは全く異なった世界に飛躍することとすることができる。それがそれは蝶が幼虫である芋虫から形のまったく違う蛹に変態するのと同様である。

人間の魂の変態の第三段階は感情の世界である。という読者は疑問を持たれるであろう。感情は確かに第一段階の欲望とも第二段階の学問とも異なったものではあるが、人間は生まれた時から感情は持ち合わせている。今殊更に第三の進化として感情の世界を持ち出すのはなぜなのか、と。人間は感情の動物だなどといわれる。感情のない人間はいない。けれど感情の世界はこれだと、純粹の感情の世界を指摘して取り上げることのできる人はいるであろうか。大方は欲望と理論と感情がごちゃまぜになって区別がつかず、自己のコントロールが効かずに暮らしているのが実情ではなかろうか。ここで言うところの魂の第3段階の変態の世界とは、自分の感情によって生まれてくる大元の世界をはっきり認識した境地のことを言うのである。この第三の境地への変態はどうしたら可能なのであろうか。

純粹な感情の世界に入るためには宗教的または芸術的な修行が必要である。従来宗教とは心悩

める者の慰めのために存在すると思われてきた。もちろんその効用もないわけではないが、真実には人間の魂の五段階の変態のうち第二から第三の段階への変態の修行の方法を説くものとしてもっとも重要な存在意義がある。

その修行は、第二の学問の段階の修行が進歩の学びであるのに対し、これは退歩の学びということができる。学問は身につけるといふ。身につけたいろいろな知識や信条は自我を形成する。自我の内容である知識や心情が大きく深くなるほど学問も進歩し価値を増す。

それに反し第三段階の道は身につけた知識を再点検して、それらの知識は自我の身のまわりにつけた着物なのであって、自我そのものではないと心の内に否定していく道である。「汝ら翻りて幼児の如くならずば天国へ入るを得じ」「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」これらの教えは皆第三の段階で変態するための方法を示すものである。

こうしてその退歩の修行の末に出会うものは、その昔自分が無自覚に赤ん坊として広い宇宙の中へ生まれて生れ出てきたその宇宙が、実は自分の意識の本体そのものであると自覚認識される世界である。自我の束縛から解放されて広い宇宙と一体となる。このとき人間はちょうど蝶が脱皮変態するがごとく小さい自我の皮を破って自由な天地に飛び出す変態の様子を実感するのである。

飛び出した宇宙は果てしもなく広い宇宙であり、そこには仏教で寂光の浄土と呼ばれるごとく和やかな

暖かい光が満ちている。そこでは従来色と思われていたものはすべて光である。赤い色とは実は赤い透明な光であった。「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光・・・」とある阿弥陀経の意味が文字通り了解される。ふと我に帰ると小さな小さな、自分を抱いて生かしてくれる宇宙の愛が心の底からの幸福感・安堵感となって感じられる。従来自分が勝手に生きていると思っていたその自己が、実は大きな愛に抱かれて生かしていただいていることを悟る。この世界が感情の発露の世界であり、芸術・宗教の心はこの宇宙から発現してくることが理解される。

この第三段階の世界では第一第二の段階の束縛から離れた自由な開放感の気分を味わうことができる。しかしこの自由開放は四六時中続いているわけではない。宗教的な修行によってこの自由を得た人は、自己一人においては束縛から離れて自由である。しかし社会には自分だけでない、まだ不自由な我に生きている人が沢山いる。この中に入れば元の木阿弥に帰ることとなる。芸術家も芸術活動に没頭している時は美の世界に自由に遊ぶことができるが、それ以外の時間は従来煩わしさに帰らねばならぬ。具象の絵を収めて美の世界を究めた後は社会の現象に、自己の思うがまま、の想像力を働かし、抽象の絵の中に遊んだのがピカソであった。

宗教家の中には限られた時間の光明に飽き足らず、常時魂が光明の世界に住むことができるよう新しい修行に出発せんと決意する人がいる。この新しい出発の時から人間の魂の進化変態の第四段階が眼前に開けてくる。この段階は人間の道德の世界である。

魂の第一第二第三段階は自利の行動である。欲望も学問もまた自己の自由を求めることもすべて自分のための行いである。それが第三段階で自己の自由を得てからのち、光明への常住へ向かう道利他の道である。欲望と学問と感情をその場その時でどのように選択して行動したらよいかの判断力を養成する段階であり、とりもなおさず道德の世界のことである。

自らはすでに救われている。だからまだ魂の自由を得ていない昔の自分の境涯にいる人々を、どうしたら自由を知らずことができるのかの修行である。仏教ではこの修行を菩薩行という。その知恵を般若と呼ぶ。この道は道德の道であり、政治の仕事でもある。

第一段階から第三段階に進む変態の道はむしろ短いものといえることができる。欲望と学問とで構成された自我の内容を反省して、そのそれぞれを統一することは自我の内容が有限であるからその半生退歩の学も有限である。

それに対し第四の段の利他の道は、自分をとりまく他の内容が無限ともいえるほど多様であるために、それらを救う道も限りなく遠い。仏教はこの道の遠く長いことを「阿弥陀五劫思惟の願」とも「大通智勝仏十劫座道場」などと表現している（劫とは無限の時間の単位）地球上の人間一人一人を善導して、この世界に一人の悟らない人もいない世の中を築くことはまったく夢のようなことである。

それならば恒久平和の真善美が整った人類社会を創造することは不可能と諦めなければならないのか。否、希望はある。魂の第四段階の変態を完成させる法則であり、更に魂の進化の最高段位 第

5 段の精神の内容を余すところなく表現することができる原理が、現在の人間の意識の上に復活してきたからである。

それはイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理という。この原理は 3000 年前までは「世界はひとつの言葉であった」（聖書）として世界統一基本法則の言語であり、その時の為政者により故意に人類の物質文明が完成に近づくまで、人間の表面意識から隠されたものである。魂の進化の最終段階は人間の創造意志の世界である。この世界の原理法則である五十音言霊によって見ると、人間の魂の一段より五段に進む人間の精神の構造は簡単明瞭に表現することができる。この魂が五つの段階において進化変態すると説明できるのも実はこの言霊の原理によるからである。魂の変態の順序に従って第一段階欲望から言霊ウオアエイの五段階が存在する。人間の魂はこの五段階（五重）を住家とする。日本語の家の語源である。魂の第二段階である学問による物質科学の高度の発達はその第一段階の欲望に基づく産業経済を今日見るがごとく繁栄させることができた。

第五段階の創造意志の原理の復活再現は、物質文化の上に第四段階の道徳政治の社会を建設することを可能にする。これによって人類は新しい変態を成し遂げ栄光の世紀へ羽化登仙するのである。